

「東南アジアの陶磁器」

開催日時：2016 年 11 月 27 日（日）

会場：鶴見大学会館 2 階サブホール

JR 京浜東北線「鶴見駅」または京浜急行線「京急鶴見駅」／「鶴見大学会館」は大学キャンパス内ではなく、「鶴見駅」そばにあります。鶴見大学 HP アクセス <http://www.tsurumi-u.ac.jp/about/accessmap/>

プログラム

午前の部 / 司会：坂井 隆（大会委員）

09：45 開場

10：15 開会挨拶 東南アジア考古学会 会長 田中 和彦（鶴見大学）

10：20－11：20 基調講演 「東南アジアの施釉陶磁器」

佐々木 達夫 先生（金沢大学名誉教授）

11：20－12：00 発表 「マニラ・ガレオン貿易で運ばれた東洋陶磁」

野上 建紀（長崎大学）

12：00－13：00 昼食 / 13：00－13：25 会員総会

午後の部 / 司会：久保 真紀子（大会委員）

13：30－14：10 発表 「ベトナム中部の陶器生産と編年：17－19 世紀を中心として」

菊池 百里子（大学共同利用機関法人人間文化研究機構）、

菊池 誠一（昭和女子大学）

14：10－14：50 発表 「カンボジアの陶磁器」

田畑 幸嗣（早稲田大学）

14：50－15：30 発表 「ミャンマー・モン州の窯跡踏査及びベンガル発見の施釉タイル」

坂井 隆（国立台湾大学）

15：50－16：50 総合討論 / 司会：田中 和彦

16：50 閉会挨拶 東南アジア考古学会 副会長 山形 眞理子（金沢大学）

佐々木 達夫「東南アジアの施釉陶磁器流通」

東南アジアの施釉陶磁器の生産開始は、中国や西アジアより遅れ、朝鮮・日本と似た時代的展開を見せる。ベトナム、タイ、カンボジア、ミャンマーでは、窯跡発掘と製品研究が進み、遺跡出土品から地域内の流通と使用状態が研究されている。2つのテーマを取り上げる。

1. 東南アジア海域の施釉陶磁器流通の始まり

唐代陶磁器を積載した船がベトナム中部沿岸で沈んだ。東南アジアの施釉陶磁器はまだ流通していない。東南アジアや西アジアの遺跡から出土する種類の陶磁器が引き揚げられた。広州産壺の底部に墨書文字が記され、9世紀前半に広州を出港してインド洋に向かう貿易品の組合せが分かる。

2. 東南アジア産陶磁器の大量輸出時代

14世紀後半から16世紀はミャンマーやタイ、ベトナム産の陶磁器がインド洋に大量輸出された。一部製品は日本まで到達している。アラビア半島遺跡出土の東南アジア陶磁器と中国やイラン陶磁器との組合せ、及び主要産地のミャンマー窯跡発見経過を述べる。

野上 建紀「マニラ・ガレオン貿易で運ばれた東洋陶磁」

マニラ建設後に間もなく開設されたマニラ・ガレオン貿易によって新大陸の銀が大量にアジアに流れ込み、そしてアジアの産物が太平洋を越えて新大陸に渡っていった。そのアジアの産物には中国、日本、東南アジアの陶磁器も含まれていた。景德鎮産の染付製品をはじめとした中国磁器がラテンアメリカに広く流通していたことは知られていたが、近年の研究によって日本磁器もまた中米、カリブ海、南米に至るまで流通していたことが明らかになってきた。その年代が17世紀後半から18世紀前半に限られ、器種については芙蓉手皿を主とした皿類、チョコレートカップを主とした碗が主体であることもわかっている。また、東南アジアの壺も商品のコンテナとして運ばれ、現地で再利用されていたことも知られる。そして、これらの東洋陶磁は、プエブラ焼など現地の陶器の意匠に大きな影響を与えており、新大陸は大航海時代が生んだもう一つの東西の文化交流の場となった。

菊池 百里子、菊池 誠一「ベトナム中部の陶器生産と編年：17-19 世紀を中心として」

これまでの発表者による研究では、ホイアン地域で出土したベトナム産陶器を用いて 17 世紀の器種組成と編年を行った。本研究では、この研究をさらに発展させ、近年のホイアン地域の調査で出土したベトナム中部産陶器も併せて集成、分類し、また中部の各陶器生産地の資料と比較することで、17 世紀から 19 世紀のベトナム中部産陶器の編年試案を提示する。

田畑 幸嗣「カンボジアの陶磁器」

長らく生産の実態に不明瞭なところが多かったクメール陶器であるが、日本人研究者による 1995 年のタニ窯跡群の発見と発掘調査以降、灰釉陶器窯を中心に生産遺跡の調査が進展した。またタニ調査に触発された現地研究者の精力的な踏査によって、新たな資料が多数報告されて来ている。さらに近年では、これまで現タイ領でしか存在が確認されていなかった黒褐釉陶器の大規模窯跡群 がアンコール朝の中心地にも存在したことが明らかになりつつある。いっぽう輸入陶磁についても、フランス人研究者らによってアンコール朝初期の都市遺跡から唐代の資料が報告されており、アンコールの陶磁器生産と流通の研究は新たなステージを迎えているいえよう。本論では、こうした最新の発掘調査成果をもとに、在地陶器の生産技術体系、年代観、在地陶器と輸入陶磁の比較からみたアンコール社会における陶磁器の社会的位置づけ、15 世紀以降のクメール陶器消滅問題などについて論じてみたい。

坂井 隆「ミャンマー・モン州の窯跡踏査及びベンガル発見の施釉タイル」

2013 年 9 月に、ウー・サン・ウィン氏とナン・カイン氏の案内により、ミャンマー各地の陶磁器関係遺跡を短期間踏査した。この踏査で最も印象的だったのは、ほとんど知られていなかったモン州地域の窯跡群であった。中でもカレン州との境界のカウ・ベイン地区踏査は、政府軍との和平が成立したばかりのモン軍の警備によって行った。この地域ですでに発見されていた多くの青磁と黒釉の窯跡を訪ねたが、その一つのカウ・ドン窯跡では長く謎とされていた白釉緑彩片が後日確認されたという。本発表では、そのようなモン州地域の窯跡の状態を報告する。またそれに加えて、バングラデシュとインド西ベンガルの 15 世紀イスラーム遺跡発見の施釉タイルも紹介したい。これらは西方イスラームタイルを模倣したものだが、技術は明らかに異なっており、ミャンマー陶器の影響が想定できる。両者をつなぐラカイン州の状況が不明なので関連を明確にはできないが、同じベンガル湾陶磁器文化圏の例として見てみたい。